（平成五年七月七日　研究例会報告）

江戸期における中國白話小説の解讀
―高階正巽譯『金瓶梅』をめぐって―

井上　泰山

鹿児島大學附屬圖書館玉里文庫の一に、文政・天保年間の訓譯抄本『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』がある。これは所謂張竹坡本『金瓶梅』一百回の原文・批文に對して高階正巽が訓譯を施し、餘白に註釋を書き添えたものである。

本書については既に徳田武氏の詳細な報告が備わっている（「遠山荷塘と金瓶梅」）。氏はその中で、本書が本邦初譯であること、遠山荷塘本人の見解を示す註釋が含まれていること、などから、その資料價値の高さを指摘している。從って、要點はこれに盡きているとも言えるのであるが、註釋全體を更めて丹念に再讀してみると、恐らくは紙幅の關係であろう、氏の未だ言及されていない側面も残されているように思われるので、今回敢えて發表のテーマに掲げた次第である。

本書についてまず第一に興味深い點は、複數の人々による『金瓶梅』の讀書會を背景にして成ったと思われることである。具體的に氏名を確認し得る參加者は遠山荷塘と喜多村節信の二人にすぎないが、江戸時代末期における中國白話小説會讀の模様を髣髴させる資料として極めて貴重である。

ただ、残念ながら、會讀の時期・回數等については明らかではない。本書各回末尾に記された譯出年時によれば、第五〇回の文政十年（一八二七）が最も早く、第九五回の天保三年（一八三二）が最も遅いことから、この間前後約五年にわたって譯稿が作られたことはわかるものの、その前提になったと思われる會讀がいつ頃どの程度の間隔で催されたのか、詳細は不明である。

また、實際にどのような形で會讀が進められたかという點についても、具體的状況を推し測る材料は乏しいが、少なくとも、原文講讀にあたっては訓讀のみでなく中國語の原音が披露されたと思われる。そのことは、随所に見られる「是似イズレモ華音ハズウナリ」（五回）といった音註によっても窺えるが、單語に添えられたカタカナによる原音、例えば、「怕怎的（パアツェンテ）」「甚麼（シモフ）」などによって明らかである。

會讀にあたっては複數の版本が用意され、必要に應じて校合されたらしい。原文の字句の異同に關する註記、「而一本作面」（六二回）、「點袖珍本作点」（四九回）や、「這ノ三行半之評一本ニ有リ補之矣」（八六回）などの註がそのことを物語る。

語釋に際して多くの書物が參照されていることも注目すべき點であろう。私の調査した限りでは、全百回の註記に計一六〇種餘りの書名が見える。經史子集のあらゆる分野にわたる書物を可能な限り引いて難語に挑もうとしたさまが窺える。

ここで、本書によって得られる荷塘に關する情報をまとめておく。まず、荷塘が實際に會讀に加わった時期はいつ頃であったか。これについては、「一圭」の名が現われる回數とその譯出年月日の記載、及び荷塘の没年などから、文政十一年を中心とする比較的短い期間ではなかったかと推測する。註の書込みが、全一百回のうち前半部分に多く、後半以降極端に少くなるのも、恐らくはそのことと關係するであろう。

本書の註釋部分には荷塘の號である「一圭」又は「圭」の字が全部で十七箇所に見られる。該所に引かれた荷塘自身のものと思われる見解は、現在の水準からみても概ね首肯し得るものであり、とりわけ助字の用法については、原音を修得した者にのみ備わる一見識を有している。從って當然の事ながら、荷塘の意見は相當の重みをもってむかえられたものと思われる。高階正巽が荷塘を師と仰ぎ（第二六・二九・三三・三八・三九回末尾の註記に「荷塘一圭門人鉛汞陳人高階正巽譯」などとある）、「這個二九回荷塘圭上人句讀別等閒看罷」などの戒語を添えるに至ったのも、單に二人の年齢差によるものではなく（荷塘は正巽より十一歳年長）、荷塘自身に敬慕されて然るべき人格と豊かな學殖が備わっていたと考えるべきであろう。

右の如く、正巽が荷塘に傾倒していたことは疑いないが、こと學問に關する限り、一方が他方に絶對服從を強いる硬直した師弟關係ではなかったと思われる。第三五回の眉註に、「コレハ鉛汞ノ譯ナリ本文ノトホリハ一圭ノ点ナリ大ニ誤ル（中略）コレ鉛汞ノ訳也コレニテトカウアルマイ」とある。また、第二五回のように、互いに異る訓譯を「一圭」と「鉛汞」の名のもとに併記したものもある。これらはいずれも正巽と荷塘の關係を窺う興味深い資料であって、日頃敬慕して止まない「師」ではあっても、その説をただ鵜呑みにしていたわけではなく、時と場合によっては両者の間に鎬を削るやりとりがあったことを思わせる。

以上、本邦初譯『金瓶梅』につき、背後に存在したと思われる會讀の様子、荷塘の位置付け等を中心に報告した。最後に、本書のマイクロフィルムによる閲覧を快諾された鹿児島大學附屬圖書館に對し、この場を借りて心から感謝の意を表したい。